余儀なくされ、ここに〝以夷制夷〟の羈縻政策の出発を見るとする。また同時に辺防軍に各部族兵を採用、各塞外民族の内徙を見、永嘉乱以後の伏線と次代の民族融合の出発点としての意義をのべる。また農民兵を失つて刑徒の兵役への使用が兵の賤視化の契機となつたとしている等が印象に残つた。以上まことに雑然とやや極端な恣意的解釈も多い本であるが、我々の思考を誘う思いつきにも富んでいる。なお理論的な面でも、封建国家土地所有制と私人地主制を如何に統一的に把握するか、普通私有の徴標とされる土地買売の事実を如何に国有論と調和させるか等、候外盧氏の理論と対比しつつ興味を惹く点もあるが今は省く。

（賀昌群「漢唐間封建土地所有制形式研究」上海人民出版社、一九六四、四一〇頁）

註

（1）著者の井田法の解釈は大体において郭沫若氏の見解に基いている。

（2）平仲苓次「漢代の田租と災害による其の減免」、立命館文学、一七二（一九五九、九）一七八（一九六〇、三）

（3）五井直弘「漢代の公田における仮作について」歴史学研究、二二〇号

（4）例えば西村元佑「漢代の勧農政策—財政機構の改革を関連して—」史林、一九五九、三号

（5）李亜農「周族的氏族制与拓跋族的前封建制」華東人民出版社、一九五四

（6）候外盧「中国封建制社会的発展及其由前期向后期転変的特征」（『中国思想通史』第四巻上冊、第一章、修訂版、北京人民出版、一九五九）その紹介として、礪波護「唐宋の変革に対する侯外盧氏の見解」（中国学術代表団招請運動ニュースNo.9、一九六三、一一、一五がある。）

（7）韓国盤「南朝的封建土地国有制」厦門大学学報、（社会科学）一九五九年一期、（『南朝経済試探』上海人民出版、一九六三、修訂所収）

シェルクスマ著

rtsod pa—チベットに於ける僧院の論議

山口瑞鳳

S氏はライデン居住のチベット、カムKhams出身のゲ・シェ dge bçes を informant として、約一年半、チベットのいわゆる学問寺に於ける最も重要な学習方法である論議 rtsod pa をめぐり、その仕方の概要を調べ、第一章、p. 131～142でこれらをとりまとめた報告を行い、第二章、p. 142～151に於いて、rtsod pa の民俗学的な意義を考察した。

第二章に関しては、筆者は専門を異にするので、論評することは差し控える。

第一章に於いて rtsod pa はどのようにして行われるかが述べられ、主としてその用語、身振り、手振りなどについて

の解説が試みられているが、必ずしも組織的に述べられていないし、関聯する事項についても充分な説明が行われていないうらみがある。それで、S氏の示した興味深い報告を補い、傍ら、誤りと思われる点も訂正して見たい。

我が国で既に出版されたチベット関係の書物の中、特にこの rtsod pa を含んだラマ教徒の学習方法に関説したものとして次の二書をあげて置きたい。

多田等観「チベット」　岩波新書　昭和十七年

長尾雅人「蒙古学問寺」　全国書房　昭和二十二年十月

S氏は、先ず、Obermiller が Phar phyin skabs brgyad ka（般若波羅密八章本）について述べた yig cha の内容形式、dgag gshag spoṅ（spaṅ ではない。Obermiller の誤。）gsum の説明を冒頭に引用する。(p. 131) 然し、後に触れるように、Obermiller が正しく解説したこの三段階についてS氏は正しく理解していない(p. 134)。又、yig cha についても然るべき説明を与えていない。

yig cha とは、単に manual というだけでは充分説明しきれるものでない。同一宗派の同一の寺院 dgon pa にあつても、grva tshaṅ（学堂）が異ると、その yig cha も違つて来る。学堂には夫々固有の yig cha があり、yig cha には亦系統がある。或る grva tshaṅ と他の grva tshaṅ との間で、問題の rtsod pa が行われるような場合も、一般に、同系統の yig cha をもつもの同志が同席すれば、互に声援し合うという。又、ḥBras spuṅs の sGo maṅs と bLo-gsal gliṅ とは、夫々 Se ra の Byes と sMad とその yig cha の系統を共にすることは有名である。どこかの僧院の mkhan po が選出される場合、yig cha の系統の違う僧院から候補者を立てることは出来ない。

yig cha には rGya gshuṅ と Bod gshuṅ とがある。前者は印度で成立してチベット語に訳された経典、論疏類、後者はチベット人の祖師によつて述作された論疏類を指す。後者のうちには rtags gsal の仕方そのものを示すような様式で書かれたものが多い。然し、全部がそうであるわけではない。

これらの yig cha を勉強する学僧達は、その grva tshaṅ の先輩のうちから自分の先生たるにふさわしい人を選び、この人から yig cha の解説、rtsod pa の仕方など具体的な手ほどきをうける。この先輩を dpe cha dge rgan という。

学僧達は、年二回 grva tshaṅ の mkhan po（学堂長）の前で、自分の学んだテキストについて暗誦の試験をうける。これを rgyugs ḥbul という。

yig cha の学び方は、暗誦・理解・論議の三つをその方法とする。この最後にいう論議が僧院に於ける学習方法の最も大切なもので、一般に rtsod pa (b)rtsod, rtsod pa byed, rtsod pa gyag, rtsod gleṅ byed といい、文章語では、bgro gleṅ byed, rig luṅ gtoṅ などの表現が用いられる。

単なる口論を çags pa とか kha çags といい、rtsod pa とは一般に区別する。rtsod pa の内容が即ち rtags gsal で、ことの因果関係を明らかにすることに他ならない。

学僧達によつて学ばれる yig cha は普通五段階にわたる。これを俗に po ti ina 五函といつたり、po ti bcu gsum と称したりする。

1　因　明　tshad ma (pramāṇa)
2　般　若　phar phyin (prajñapāramita)
3　中　観　dbu ma (madhyamaka)
4　(小乗)律　ḥdul ba (vinaya)
5　倶　舎　mion mdzod (abhidharma koça)

先ず、同程度の学僧が集つて hdzin grva、級が構成される。論議の演習は、この hdzin grva 単位で行われる。hdzin grva の数は寺院により相違があるが普通十三以上である。(1)

tshad ma 論理学を学ぶ学級を bsdus grva といい、普通は bsdus chuṅ, bsdus ḥbriṅ, bsdus chen の三級に分けられる。bsdus chen は亦、yul yul can, blo rig, rtags rig の級に更に分けることもできる。従つて、hdzin grva は三つの場合も五つの場合もある。Sans rgyas rgya mtsho (1653–1705) によると、(2) 印度では、この bsdus grva は理論としてあつたが、形式そのものを学ぶためにチベットのように実習することはなかつたという。又、チベットでも、bsdus grva が発展したのは Cha (=Phyva-pa Chos kyi seṅ ge,(1109–1169) とか gTsaṅ (=gTsaṅ nag pa brTson ḥgrus seṅ ge、前者の弟子) 以降だという。

この bsdus grva の学習を終えた人達が phar phyin 以下を学ぶことが出来、それらの人々を rig grva pa とか mtshan ñid pa と呼ぶ。従つて、mtshan ñid pa を the student of the faculty of logic (p. 132) と訳すのは不当で、これはむしろ bsdus grva pa の訳語とするにふさわしい。mtshan ñid pa とは正しくは、論理学を駆使して phar phyin 以下の仏教の哲理を究明する学僧のことである。

rtsod pa とは論議の一般の呼称で、その仕方によつて二つに大別される。一つは、dam bcaḥ といわれる形式、他は、tshogs laṅs とされるものである。

S氏は dam-bcaḥ について (p. 132–133) と tshogs laṅs に関して (p. 133–134) 両者の区別を述べているが、充分ではないので、次に、これを補足して説明しよう。

第一の dam bcaḥ は skt. pratijnā、即ち、宗である。dam bcaḥ ba とは、dam bcaḥ gshag pa po、宗を立てる人をいう。つまり、命題を呈出して、他の質問、論難に答える人である。この dam bcaḥ ba は坐して問いに応ずる。dam bcaḥ ba の主張のすきをねらつて質問をよせる人を rgol ba po、brtsod pa po といい、これは立つて答者を攻

める。rgol ba po は入れかわり、立ちかわりして、dam bcaḥ ba の主張 dam bcaḥ（又は khas len）を崩すのにつとめる。このような訓練を通じて学僧たちは仏教の教理を如実に習得する。これが grva tshaṅ で平常演習され、dge bçes の試験としても行われる rtsod pa である。

これに対し、tshogs laṅs は、大体、dbyar chos chen mo と dgun chos chen mo とに各一回行われる儀式的 rtsod pa で、これに参加できる人は phar phyin 以上の hdzin grva に属する人でなくてはならない。同一 dgon pa 内で yig cha の系統を異にする gra tshaṅ 間の、いわば、選手による試合で、出場者は半年程前から決められていて、予め、準備をしているのが普通である。

会場には僧院全体の長 khri pa が中央に臨み、その前に、夫々の dbu mdzad を先頭とする各 grva tshaṅ の学僧が序列に従つて左と右とに数列に並ぶ。bla ma las sne ba（或は dge skos の長老）が司会して両 grva tshaṅ の選手が立ち上り、中央の一列をさしはさみ、この列に沿つて上下に歩を運びながら論議を行う。

最初に主張命題を示す人、即ち dam bcaḥ を khas len する人は一回戦の後、攻守ところをかえ、自分が相手の主張命題に質問の矢を浴せかけることになるため、phyi rgol、後に論争しかける人とも呼ばれる。これに対し、最初に khas len pa を攻撃する人を sṅa rgol と呼ぶ。tshogs laṅs は表裏二回戦であるため sṅa rgol, phyi rgol の称が出来たので、普通の dam bcaḥ の場合には、khas len する人、即ち dam bcaḥ ba と、質問する人、rgol ba po, rtsod pa po, phar gtoṅ ba が、互に交替することはないから、後者を sṅa rgol とはいわない。勿論、これに対して出来た phyi rgol の称も dam bcaḥ に於ける khas len pa には適用されない。(p. 134–135) 従つて、sitting phyi rgol (p. 135) などということはありえない。

再び、dam bcaḥ についてS氏の所説を追いながら述べて見よう。

学僧達は学期中[3] chos ra（chos ra は chos kyi kun dgaḥ ra ba＝chos kyi ra ba で、chos grva は chos kyi grva tshaṅ の略語である。grva と rva との音声学的説明が成立しても、この二つを結びつけるのは適当でない—p. 132）に於いて、毎日三回、各級 hdzin grva 単位で dam bcaḥ bshag pa の練習をする。これは grva tshaṅ の dge skos によつて監督される。この三回の練習を、shogs chos、朝課（shog chos より shogs chos の方がよい）、nin chos、昼課、dgoṅs chos、晩課という（p. 132）。

S氏は夜を徹して行われる mtshan phud dam bcaḥ のことを伝えている(p. 133)が、これは通例 khams tshaṅ で

持ち廻りによつて、五の日毎に行われる ḷna thog dam bcaḥ ともいわれるものを指すのであろうか。夜を徹して行われるからこのように称するので、いづれも正式の呼称ではない。khams tshaṅ で行われる dam bcaḥ は ḥdzin grva の区別をせず、上・下級入り乱れて dam bcaḥ の演習をするのが特徴である。

S氏が dam bcaḥ chen mo というものも dam bcaḥ の種類を示す名称ではなく、例えば、dge bçes (lha rams pa, tshogs rams pa などを含めて)の試験の dam bcaḥ とか、mkhan po を選ぶ[4] rtsod rgyugs dam bcaḥ などを指しているのに過ぎない。

又、dam bcaḥ bskor ba として示されるもの (p. 133) は、その説明によると、grva bskor といわれる昔あつた一種の道場破りのことらしい。smon lam などで lha rams pa が選ばれるような制度がまだ出来ていない以前、自信のある学僧たちは、この問答行脚によつて rab ḥbyams pa としての名声を博し、自分の地位を築いた。

dam bcaḥ の演習が ḥdzin grva の中で行われるのは普通であるが、chos ra のうちで ḥdzin grva を異にする人々の間でも行われる。これを thug dam bcaḥ という。同一 dgon pa 内での異つた grva tshaṅ の間でも、行われることがある。これも thug dam bcaḥ であるが、tshogs chen dam bcaḥ とか、rdo bcal dam bcaḥ ともいわれる。但し、dbyar chos に際して一回位行われるに過ぎない。よく似た言葉で thug pa dam bcaḥ というのもあるが、これは、dam bcaḥ の後にスープの供養のある rluṅ tshogs の一である。何の供養もない集いは skam tshogs といわれる。

dam bcaḥ のうちで最も大切なのは dge bçes の資格試験で、いわば dam bcaḥ chen mo である。

dge bçes になるための dam bcaḥ は、元来は gra tshaṅ 単位で行われ、mkhan po が主宰したもののらしい。

S氏は、試験官として mtshan shabs pa, cir pa chos rje, byad rtse chos rje を挙げている。(p. 133)

第一の mtshan shabs pa とは、mtshan ñid shabs phyi の意で、S氏のいうとおり、ダライ・ラマの mtshan ñid の勉強の相手を務める人をいう。ダライ・ラマ六世伝[5]によると、ダライ・ラマとほぼ同年の優秀な学僧数人、即ち、dge phrug (年少の学僧) と先生格の dge rgan 二人が mtshan ñid shabs phyi を勤めたことが記されている。ダライ・ラマ十三世の場合も、有名な蒙古人 Dorjeef が mtshan ñid shabs phyi をつとめ mtshan ñid mkhan po と称せられた。mtshan shabs pa が試験官 dpaṅ po をするなら、或は smon lam に出場する人を許可する bkaḥ ḥgyur dam bcaḥ のそれをつとめたのかも知れない。

çir pa chos rje は Çar pa chos rje の Khams 方言によるなまりであり、byad rtse chos rje は添後字 na を da と誤ったもので、正しくは Byaṅ rtse chos rje である。いずれも Tsoṅ kha pa の建てた dGaḥ ldan rnam par rgyal baḥi gliṅ の二つの grva tshaṅ、Çar rtse と Byaṅ rtse の mkhan po を指す。従って、これらの grva tshaṅ で dge bçes となる場合の dpaṅ po であるとの意であろうか。

dge bçes というのは一般的な呼称でその中でも等級があり、dGaḥ ldan rnam rgyal gliṅ とか Se ra theg chen gliṅ で得られた dge bçes の学位は gliṅ gses (ɕ) といわれる。これは、Çar rtse と Byaṅ rtse の大衆を合せた tshogs chen、或は Byes と sMad の grva tshaṅ を合せた tshogs chen、即ち、僧院 dgon pa全体、いいかえると gliṅ 全体の見まもる中で dam bcaḥ を置いて得られた学位だからというので、gliṅ gses (gliṅ のうちの等級) というのである。hBras spuṅs では同じ学位を rdo rams pa という。これは ḥBras spuṅs の tshogs chen rdo bcal で dam bcaḥ を置いて得られた学位だからである。ɕ 氏は rta ra ma pa と記している (p. 133) が、rdo rams pa の誤記であろう。古くは dge bçes のことを rab ḥbyams pa といった。今日、rams pa というのは rab ḥbyams pa の省略形である。

然し、位を得た人のみをいうのでなく、その為に専念する人もいうので、例えば、mtshan ñid pa 一般を指して rig rams pa というのは、rig luṅ rab ḥbyams pa の略である。

gliṅ gses、rdo rams pa より程度の優れた dge bçes を bkaḥ bcu pa という。これは bkaḥ po ti bcu rab ḥbyams pa (bkaḥ po ti は全部で bcu gsum である。)の略である。これと似たので bkaḥ rams pa というのがある。この方は bkaḥ po ti bcu gsum rab ḥbyams pa の省略形で、dge bçes となるべく、bkaḥ po ti bcu gsum、即ち、仏教学を完全に学び終えた人の意で、現実には、次に説明する lha rams pa、或は、tshogs rams pa となるのを待つ人についていう。

dge bçes を志す人のうちで極く優れた人は、lHa sa の sMon lam chen mo (Hor zla 一月三日—二十五日) 或は、tshogs mchod (二月二十日—三十日) のいずれかに際して、Jo khaṅ (ḥPhrul snaṅ) で dam bcaḥ を置くことが出来る。これに成功した人が、lha rams pa, tshogs rams pa と夫々称せられる。これらの試験の試験官 dpaṅ po は三大寺の khri pa, mkhan po 政府の僧職の高官がつとめる。特に、lha rams pa となるためには、あらかじめ願いでて予備試験を受けなくてはならない。これが bkaḥ ḥgyur

dam bcaḥ、即ち、ダライ・ラマの許しをうける dam bcaḥ である。

smon lam chen mo の際、dam bcaḥ を置くことが許されるのは十四人で、そのうち賞を与えられるのは、古くは三人、近くは五人に限られている。dam bcaḥ の行われる場所は Jo khaṅ (ḥPhrul snaṅ) の khyams rva chen mo 又は gSuṅ chos hrag である。

大体の時間割は次のようである。

1. tho reṅs skam tshogs (dam bcaḥ)
   早晨より khyams ra chen mo で
2. tsha rtiṅ dam bcaḥ
   八時頃より正午まで gSuṅ chos hrag で
3. dgoṅs dag gi dam bcaḥ
   午後一杯、日暮まで、gSuṅ chos hrag で
4. dgoṅs tshogs kyi dam bcaḥ
   日没後、khyams ra chen mo で

何れも dGaḥ ldan khri pa の主宰で行われる。

tshogs mchod の場合も、ほぼ同様の時間割である。smon lam の dam bcaḥ はダライ・ラマが Jo khaṅ に臨幸してその gziṃs chuṅ からこれを見るのが常である。

S氏は冒頭に Obermiller が yig cha の科段について述べたところを引用し、一三四頁にその三つの科段を再びとり上げるが、後者の正確な解説が必ずしもよく理解されていない (p. 134)。第一段の gshan lugs dgag pa とは、自派以外のものがその問題について示す基本的見解を破ることである。次の raṅ lugs bshag pa は決して自説を提示すること (p. 134) でなく、自説がよって立つ基盤になる見地を示すことである。従って、ここでは Obermiller のいうとおり、関係主題を定義したり、外延関係を見きわめたりするのに止る。第三段の rtsod pa dpoṅ ba というのが、自説の見地に反する立場から寄せられた他のものの具体的主張を自説によって破ってみせることである。従って、第三段は、第一段と第二段とで示された基本的見解を対決させる rtsod pa の中核をなす科段である。

rtsod pa に於ける用語の説明 (p. 135) のうちにS氏は ma yin par ḥdod という使い方を示すが、ḥdod は yin par ḥdod とか yin na ḥdod、或は単に ḥdod と用いられ、相手の主張を受け入れるときに使う。相手の主張が肯定形の場合は、肯定のままに、否定形の場合は否定命題をそのままうけ入れるので、後者の場合は、単に ḥdod といい ma yin par ḥdod とはいわない。具体的に示すと ma yin par thal とか、ma yin paḥi phyir ときたものをそのまま承認する返事が ḥdod で、yin par thal, yin paḥi phyir に対しては同じ返事が、yin par ḥdod, yin na ḥdod 又は、単に

ḥdod ともなる。

yin par thal とか ma yin par thal に対し、承服出来ない場合、ciḥi phyir とたたみかけ、これに答えて yin paḥi phyir とか、ma yin paḥi phyir と説く。この phyir が又承服されない場合には、rtags ma grub とか、単に ma grub という。但し、この場合は、相手のいうところが ma yin paḥi phyir ならば、ma yin na rtags ma grub ともいいうる。

主張する命題の成立が khyab、不成立が ma khyab 又は、khyab pa ma byuṅ となる。

rgol ba po 問者が dam bcaḥ ba 答者に或ることがらに関し説明を求めるとき gshog という、このとき dam bcaḥ ba は rgyu mtshan ḥdren pa、即ち、そのことがらと主題との関係の説明をしなくてはならない。同様に、luṅ çog, (luṅ) khyer çog, 或は、khyer la çog, khyer (p. 138. khyer la çog の la は命令法を接続する場合の助辞) という場合、答者は根拠になる聖典 (tripiṭaka 其の他、自らの信奉する祖師の言説も含む。) から luṅ ḥdren pa、引用句を示さねばならない。これらの二つを同時にするよう求める場合、luṅ don gshog と rgol ba po は dam bcaḥ ba に迫る。後者は luṅ を引用し、それと自らの立論との関係を説明しなくてはならない。即ち、luṅ don gshag pa である。

このようにして激しいやりとりの後も、dam bcaḥ ba の主張が固く守られることを、ḥdzin mtshams dam po (khas len ḥdzin paḥi mtshams dam po)、khas len mkhreg po などという。

これに反し、yin na khyab、yin pas khyab と主張した命題が ma khyab、khyab pa ma byuṅ とされた場合、khas len çor ba とされる。

S氏は khas len slog pa (p. 136) を誤つて解している。これは tshogs lans の用語で、第一回戦で rgol ba po (即ち、sṅa rgol) であつた人が第二回戦で khas len pa になることをいう。phyi rgol が khas len する役割を sṅa rgol に返すの意である。

khas len の意味について、S氏は Jäschke のいうところとの関連がわからぬ (p. 136) としているが、字の示すところは、khas、口頭によつて、(命題が khyab であると) len、積極的に取り上げる、即ち、「確言する」ことを意味する。dam bcaḥ ba と khas len pa が坐せる答者に関することは、dam bcaḥ ba を置く人、即ち pratijñā を khas len する人が坐して答えることになつているからで、何の奇異なこともない。(p. 136) 尤も、tshogs lans の場合は、dam bcaḥ ba も立つたまま答える。著者は rtsod pa を対等の disputation と称しているのではなかろうか。dam bcaḥ ba、

若しくは khas len pa は、常に答える立場にあつて、問う立場に逆転することは殆んどないことに注意しなければならぬ。

S氏は、tsha po を「白熱した」の意味にとるのは、p. 136 にあつては、これを正しいとしても、負けた dam bcaḥ ba に対して tsha とか、ḥkhor gsum tsha、或は dios ḥgal tsha という場合、この tsha を tsha po の意味にとることは困難である。むしろ、tshar、「してしまう」の意から来ているとする方がよいのでなかろうか。disputation が agressive であることをいうため、この tsha を tsha po の意におしつけてはならない。完全に答者の敗北したことを hkhor gsum dios ḥgal du soṅ という。hkhor gsum tsha の場合は、殆んど dios ḥgal だとの意味で、その間に多少の違がある。

S氏は hkhor gsum についても簡単に述べる(p. 139)が、要領を得ていないので、左に実例を挙げて ḥkhor gsum とは何かを見ようと思う。

次の文の原文[7]は bsdus grva の bsdus chuṅ の rtsod pa spoṅ ba の段の冒頭に示されたものである。ただ、rtsod pa の形式に従つて書き直した。

Aは rgol ba po、Bは dam bcaḥ ba、括弧の中は書き直した部分である。

今、主辞として chos duṅ dkar po がとり上げられる。然し、今の場合、chos duṅ dkar po には、chos duṅ dkar poḥi kha dog chos can と、chos duṅ chos can との二面、即ち、色を問題にする場合と材料を問題にする場合との二つが考えられる。この主題の定義を曖昧にしたままBが dam bcaḥ を置いたのに対し、Aがこれを把えて論破するのである。

B 1. (chos duṅ dkar po yin na |(白法螺ならば、dkar po yin pas khyab |) 白であるということは妥当なり。)

A 2. (ḥo na) chos duṅ dkar po chos can |(しからば) 白法螺なる dharmin は、kha dog yin par thal | 色であるべきなり。

B 3. (ciḥi phyir |) (何故か。)

A 4. dkar po yin paḥi phyir | 白であるから。

B 5. ma grub |(その因は) 成立しない。[8]

——○——

A 6. (ḥo na) chos duṅ dkar po chos can (しからば) 白法螺なる dharmin は、dkar po yin par thal | 白であるべきなり。

B 7. (ciḥi phyir) (何故か。[9])

A 8. chos duṅ dkar po yin paḥi phyir na

ḥgal khyab la ḥbud (=rtags ḥgal, khyab pa ḥbud)白法螺であるから。と予にいわせたからには、汝は(dam bcaḥ で妥当なりといつたことと同じことを予がいつたのに、受け入れずciḥi phyir と反対し)、別の rtags を期待し、自らの dam bcaḥ の妥当性を損つた。

B 9. (ḥdod)(然り。[10])

A10. (ḥo na) rta dkar po chos can | (しからば)白馬なる dharmin は dkar po yin par thal | 白くあるべきなり。

B11. ciḥi phyir | 何故か。

A12. rta dkar po yin paḥi phyir | 白い馬なるがため。khyab pa ḥgrig | 妥当性は(汝の dam bcaḥ のそれと)一致する。

B13. ḥdod | 然り。[11]

A14. ḥdod mi nus te | 然りとはいえぬ。即ち、

A15. bem po ma yin paḥi phyir te | 色法ならぬがためであり、

A16. gaṅ zag yin paḥi phyir te | 生きものなるがためであり、

A17. rta yin paḥi phyir | 馬なるがためである。

B18. ḥdod | 然り。[12]

右について ḥkhor gsum を考えて見よう。

先ず、tshad ma la gnod としては、dam bcaḥ の chos duṅ dkar po yin na dkar po yin pas khyab は、若しBの欲するように、kha dog を取り上げるとしたら chos duṅ dkar poḥi kha dog yin na dkar po yin pas khyab. としなくてはならぬ。単に、chos duṅ dkar po として取り上げると、白法螺は chos duṅ の一つであり、chos duṅ は ḥbyuṅ ba の一つであるから、色を問題とする場合の正しい取り上げ方をしていないことになる。即ち、tshad ma を損ねたことになる。

第二に、khyab pa raṅ lugs la grub としては、A 10 と A 12 とに於いて、rgol ba po 問者が自分で提出した命題の khyab pa 妥当性を相手に認めさせている(B 13)。これは喩に相当する部分である。この喩を手がかりに dam bcaḥ ba の命題を破る。喩はその都合を意図して構成されている。つまり rgol ba po 問者の raṅ lugs 都合によつてとりあげた命題で妥当性を相手から取りつけたわけである。

第三の rtags pha rol pos khas blaṅs というのは、A 15 からA 17に示された rtags が、B 18によつて「然り。」とされたことを指す。一旦・B 13で「然り。」といわせた後、最後の段階で「然りとすることは出来ぬ。」として、Aが本当に主張する rtags を相手に認めさせた。これによつて万事が決定的

になるのである。pha rol po とは dam bcaḥ ba である。

dam bcaḥ に含まれた tshad ma la gnod 現量のとり方にある誤に注目し、rgol ba po が、同様の誤を含んだ比量を相手、即ち dam bcaḥ ba に示し、現量と比量に共通の誤つた khyab pa 妥当性を確認させる。然る後、一転して、比量に於ける誤りを指摘し真の rtags 因を明らかにする。その因を dam bcaḥ ba に再び確認させることによつて止めをさすのである。

(F. Sierksma, rtsod pa; The monachal disputations in Tibet. *Indo-Iranian Journal*, vol. VIII, No. 2, Leiden, 1964, p. 130–152.)

註

(1) 多田等観「チベット」三四頁、長尾雅人「蒙古学問寺」六五—七三頁。

(2) 「ダライ・ラマ六世伝」f. 310a

(3) 多田等観「チベット」三〇—三一頁。

(4) 「ダライ・ラマ六世伝」f. 3O26, f. 304b, etc.

(5) Ibid. f. 257b–259b.

(6) gliṅ bsre, gliṅ bsrel ともかく。

(7) tshad maḥi gshuṅ don ḥbyed paḥi bsdus grvaḥi rnam bshag rigs lam ḥphrul gyi lde mig. çes bya ba las rigs lam chuṅ ṅuhi rnam par bshad pa. f. 4o, Phur lcog pa Ṅag dbaṅ Byams pa 著。

(8) 一応Bが Aをしりぞける。これで thal skor gcig が終る。

(9) ここで当然、Bは ḥdod とくるべきなのに、何故かといつてしまう。即ち、khas len çor ba である。

(10) 止むなく、然りという。

(11) dam bcaḥ の故にここで ḥdod と答えざるをえない。

(12) B 9とB 13の「然り」と矛盾する「然り」になる。

シャンバ撰（ペリンライ編）

アサラクチ・ネレト・テウケ

——新出の一蒙文年代記——

岡　田　英　弘

Monumenta Historica は蒙古人民共和国科学高等教育委員会（現在は科学学士院 Shinjlekh Ukhaany Akademi）の歴史研究所から出てゐる叢書で、編集には Natsagdorj 教授が当つてゐるが、この一冊に収められた Asaraγči neretü-